



## 「熱帯中国 自然そして人間」

吉野正敏 編

古今書院, 1997年2月,

A5版, 368頁, 定価9,400円

本書のまえがきによると、編者がはじめて北京を訪問したのは、1980年1月という。中国が解放政策をとりだしてまだ間もない頃である。その後編者らは、中国科学院地理研究所、大気物理研究所、農牧漁業部などの中国側研究者との共同学術調査を、海南島および雲南省西双版纳（シーサンパンナ）を主なフィールドとして、10年以上にわたって進めてきた。その研究成果は、英文研究報告書のほか、Climatological NotesやGeographical Review of Japan, Ser. Bなどの雑誌に多数発表され、本書と同じ出版社からは単行本「雲南フィールドノート」（1993）も刊行されている。本書はその後の研究成果も加えて書かれ、編者らによる長年の熱帯中国研究の集大成というべき出版物であろう。

本書の構成は、3部からなる。第I部「総論」は、熱帯および亜熱帯中国の自然と農業の概観である。第II部「海南島」、第III部「西双版纳」は、フィールド調査を行った地域に関する、いわば各論である。第I部の各章のタイトルと執筆者は、第1章「熱帯中国」（吉野正敏）、第2章「気候」（吉野正敏）、第3章「地生態」（漆原和子・永塚鎮男）、第4章「農業」（市川健夫・許衛東・白坂 蕃）である。第II・III部の構成は、「気候」（山川修治・高橋英紀・中川清隆・田中夕美子・野元世紀・杜 明遠）、「植生」（中条廣義・牧田 肇）、「地形・土壌」（漆原和子・永塚鎮男）、「農業」（許 衛東・白坂 蕃）の4章からなる。これからわかるように、本書では気候を中心にすえながら、その影響を強く受ける植生と土壌・地形といった自然環境を論じ、さらにその自然環境と密接に関係する農業という人間の営みにも触れている。広範な分野を網羅した構成に、自然地理学者としての編者の才覚がうかがえる。

気候に関して興味深かった点をいくつか紹介する。まず熱帯中国の農業にとって大きな問題である冬の低温が、内陸部よりも海岸部で高頻度で起こること、それゆえ、雲南よりもむしろ海南島でその影響が大きいということには驚いた。通常大陸上の冷却は内陸ほど

大きいと思いがちであるが、冬のシベリアからの寒波の吹き出しは、むしろ海岸部で強い影響がでるのである。一方内陸部の雲南では、雨季・乾季という通常の熱帯地域の季節に加えて、霧の季節というものも考えられるとの指摘は興味深かった。その霧の出現頻度が近年大幅に減少し、その原因はおそらく森林破壊であるということ、あらためて熱帯林破壊の影響に驚かされた。また雲南省には夏の南西モンスーンと南東モンスーンの境界があり、夏・冬ともに気候の東西差が大きいこと、華南地方に襲来する台風が、ENSO年には非常に強いものが多く、比較的弱いものは少ないことなども興味深かった。海南島では、30mの観測鉄塔をゴム園に設置し、測器の不調などに苦しみながらも、長期にわたる微気象の観測データを得ており大変貴重である。雲南でも冷気湖や霧発生メカニズムを現地観測によって解明している。

他分野では、海南島の植生はインドシナ半島との類似性が大きく、固有植物がほとんどないこと、本来熱帯作物であるゴムは、この地では冬に落葉し、生産高はマレー半島などに比べて大きく劣るのに、その栽培が国策で急激に増加していること、農作物の限界線（図I. 4.4）が華南・華中・華北に見事に集中していること、海南島・雲南ともに森林は大きく破壊されているが、雲南には「伐らずの森」が存在し、けっして焼畑に使用しないこと、などに興味をひかれた。

以上のように大変興味深い本書であるが、いくつかの不満もあった。本書では中国での自然地域区分により、10°C以上の日の積算温度7500°C以上を「熱帯」と定義し、その範囲はケッペンの気候区分よりも広く、華南の海岸部や雲南省南部などが含まれる（図I. 1.1）。しかし第II部、第1章には「海南島は中国としては唯一の熱帯」との記述があり、混乱をまねく恐れがある。図I. 2.17の年降水量分布図の等値線に数値がないのは大きな誤りである。図I. 4.4に作物名の一覧がないこと、海南島の雨季の開始（図II. 1.7）の定義、出典がないこと、雲南の「霧季」の具体的時期の記述がないこと、は残念だった。第III部、第3章には雲南での民族の概観があると一層よかった。また民族名や地名にはもっとフリガナをつけてほしかった。

このように若干の不満はあるものの、本書では海南島と雲南を中心に、熱帯中国の自然環境と農業に関する総合的な記述がなされ、資料的価値も大きい。生産請負制の導入による農業の変化や、森林破壊による霧の減少など、大きく変貌する現代中国の一端も知ること

ができる。豊富な写真は現地イメージを深めてくれる。(東京大学大学院理学系研究科 松本 淳)  
引用文献や索引がしっかりしているのも便利である。



## 教官公募

下記の人事について公募致します。  
(名古屋大学太陽地球環境研究所)

### 記

#### 1. 公募人員：

助教授1名及び助手1ないし2名

#### 2. 所属部門：大気圏環境部門

#### 3. 研究分野：中層大気化学

現在当研究部門では、気球や航空機等のプラットフォームを利用した大気微量気体の直接観測、地上からの分光学的観測により大気圏環境の研究を行っております。また、実験室内での大気化学反応過程の解明や、新しい大気微量成分の観測装置の開発を行っています。今回の公募ではこれらの研究を意欲的にすすめて頂ける方を募集します。また、大学院等の教育・研究指導にも熱意をもち、全国共同利用研究所としての当研究所の任務を十分理解して共同利用の促進にも意欲的な方を希望します。

#### 4. 着任時期：決定後できるだけ早い時期。

#### 5. 提出書類

履歴書、研究歴、業績リスト、主要論文別刷り、研究計画書〔応募する職種（助教授、助手の別）

を明記〕。

自薦の場合は、本人についての意見を述べられる方2名の氏名と連絡先、他薦の場合は2人からの推薦書。

#### 6. 応募の締切：平成10年1月20日（火）

#### 7. あて先及び問い合わせ先：

〒442 愛知県豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学太陽地球環境研究所  
所長 國分 征

TEL：0533-89-5182

FAX：0533-84-8806

#### 8. その他：

封書に「教官応募書類在中」と朱書きし、書留で送付のこと。

#### 選考方法：

名古屋大学太陽地球環境研究所人事選考委員会の選考に基づき、同運営協議会の意見を求めて同教授会で決定します。なお、該当者がいない場合は決定を保留します。